

門 凡 4
1543
8



洛陽名所集卷之八目錄

岩屋
以善菩薩池
今宮
家野
蓮臺寺
柏森
少室山
柏野
衣冠山

鞍馬
布衣
若狹河
大徳寺
間廣堂
平野
神
明玉院

傷心谷
二瀬
上野
舟
白雲院
鷹
紙
小
六所宮

晴部山
貴布祿
萩野
蓮臺寺
頭野
岩
鷹
藤花寺
天祥社

鞍馬寺



峠はくろかりに乃がせバの乃謝靈運の末夜
 ちの歯つさげんをさよよさく回してゆくぞとてり
 西の畑とりの赤に茅屋なりぬにけくおるや
 しくもいさるのさなりせバのや薪をる力の
 星つたせきく。月とせじらぬさよ乃
 けりたぞ乃村より十町ぞりりびぐら
 まくつものふく。瀧をらほむのひさ
 らもとていさぶらうくさくさくさくさ
 びりりせ乃人れにばなぬぬさくさくさ
 いよくけ滝よさくさくさくさの力にら
 ーさなんのいさく

鞍馬寺にいらぬ日とてふくまう
燄をたきまを供く教日乃ら坐禅
しけるにまをうの女鬼きんめり火に向
いへる延起く堂れうらたう朽木乃
中に入らぬ鬼逐至る目とつりて
うごころやとてゆぐま本どなること
延毗舎門を念ぐゆきしに朽木ま
傷てその鬼と打らうぬ聖日大中
藤伊豫人ふに入延ぐうせりて
りる人ふとてしやしとて
かたけをたかうるといふ大史延とわめ

寺主少とせつりて及之月延護摩を修せり
しりて大蛇目電のどく舌火乃ら
あつて心しんをしんらとてしりて延又毗舎門
先呪と誦をうの蛇ふとてしりて
さしりて延起くもさうとて目のちたま
来て後蛇をんくわしりてしりて
ゆきとて後しんまをり人はゆりて
乃蛇を静息心にしりてさせりぬ
しりて地と大史たしまをりて延延喜
中におとす
聖怡ハ伯初の人や。詔候にとも。延喜を

まるび。後鞍馬寺に...
宇とびとび一六六人の孫陀れ像を
小豆のくづらに...
浴衣...
十六

正月寅日...
けつ...
人...

後撰集に...
我...
亭...
炭...
さ...

○僧正谷 鞍馬寺乃西の...
け...
異人...
...

天狗とておたのめり

世にけしんてげり。天狗とておたのめり。かきつらきかきくにしん出現しつらき。虫を旗星乃義よのび。乞僧ふん。巨魁として。愛宕山の太郎比良心を。次郎伴都奈れと郎富星乃た。上野の妙義坊常陸の流波法下。長山の豊あ。坊太山の伯考坊大峯れ善鬼金平六。比叡山の法性坊肥後の阿闍梨葛城れ。ひ者高回何ふ雄の内供奉如意嶽乃。天狗といふにといおほり。讃岐院を

金色の大鶴とるり。志つも七丈餘後。鳥羽院は被髪長翼乃波門なるも。後醍醐院を二の鼻勾底の王とるり。之。諸の龍車に乗たにちふとる。まかあり。い。怪客異行を足ゆり人にといひく。く。さうまかりたしめ。余いさう。さう。バ。わりさくつひ

暗部山

○けいハ くらまら乃つさ
紀貫之のよ梅乃花白ふまへくくらふら

やうに越えたりてきくそまゝに在るが
よ。秋乃よのあまらふりあつた終を
くらふまらそらぬらうなつていぼと
も古今集にみへつたま。又新拾遺に梨
式部とつゆはまらつたらぬかつてま
けが縁とつゆにらつたつてつてせ
ふつとつれむらつたつてつてつて
まあつてつて誰れに拾つてつてつて
ゆけつてつてつてつてつて

山菩薩池

○け池は秋乃よの南まらつてつてつてつてつて

にめつてつてつてつてつてつてつてつて
まらつてつてつてつてつてつてつて

布面

○いふにらつてつてつてつてつてつてつて
中院准后親房古今序流よ小野小町まらつてつて
仁徳天皇の御和のつてつてつてつてつてつて
たつてつてつてつてつてつてつてつて

二瀬

○けふは多る魚のふたつ



貴船

貴布祢 貴船

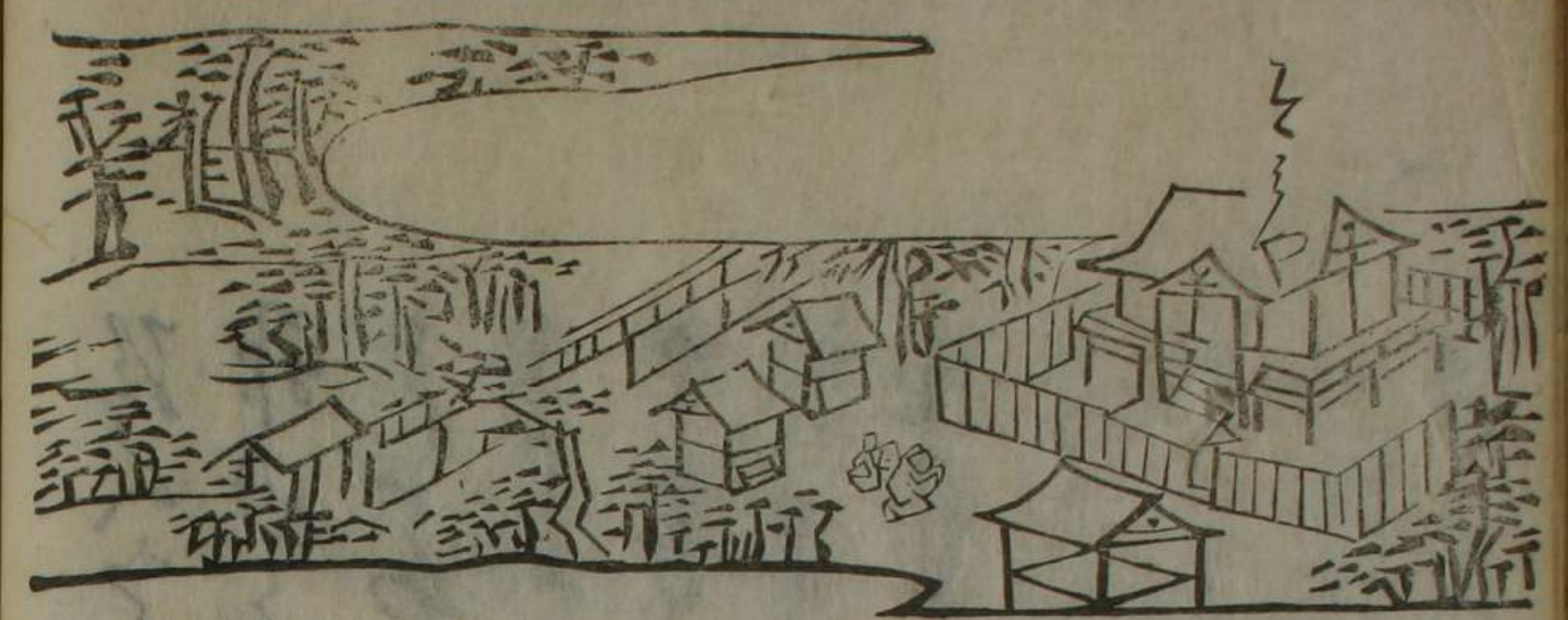
○ け社ハ 鞍馬寺のふもとにあり

○ 別宮ハ け社乃うらうらにたりき

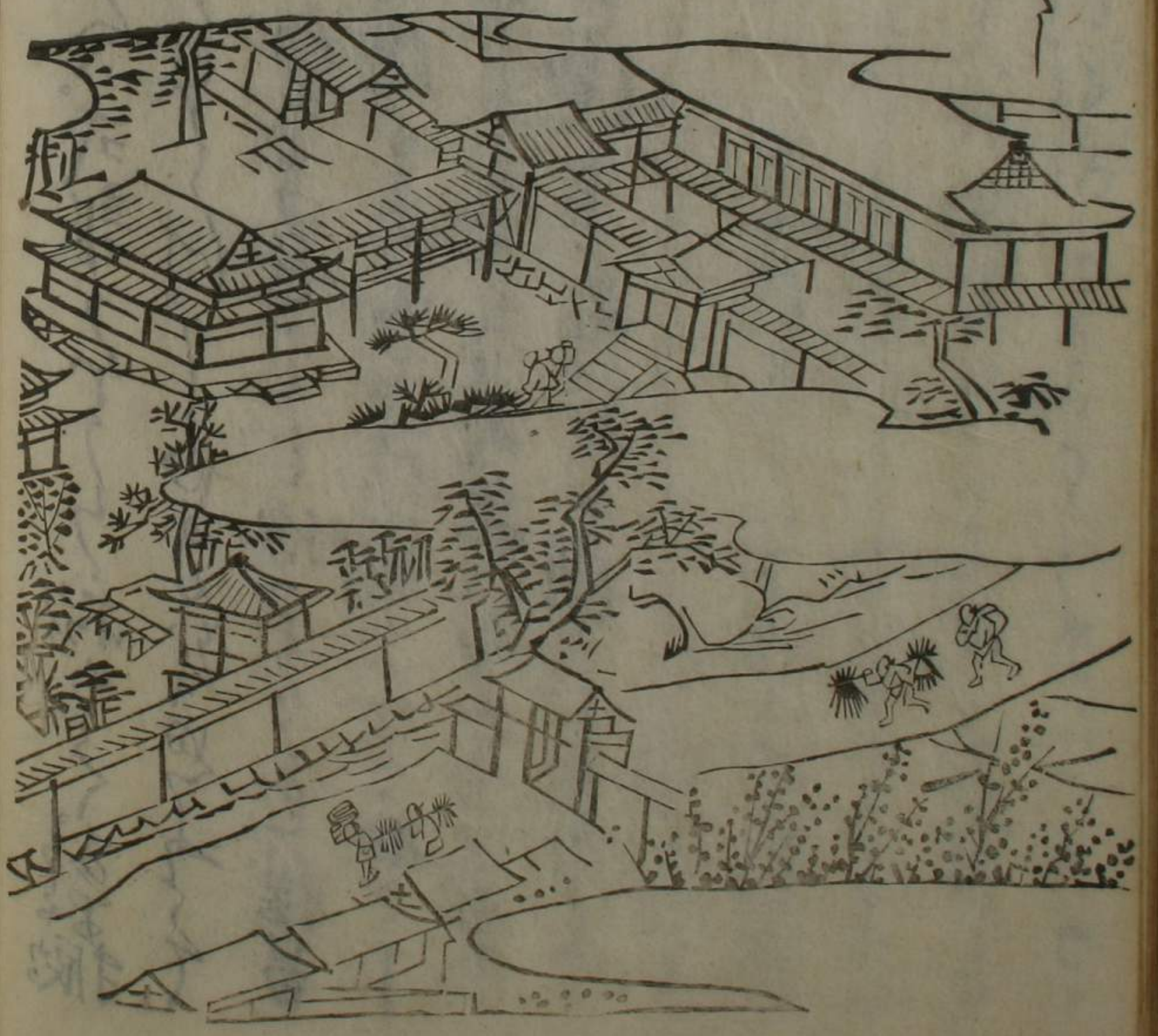
日本紀曰伊弉諾尊斬斬遇突智為三段其一
段為高靈龍丁又神書抄云高靈龍與周靈同
龍神類也貴布祢亦是也

今雨と行りぬをやしうにおほくけ社を
まけりし忠賀公の社司新平ぬを結とさ
おりたのうらとふとらりせにけく廿
せきにがとせに上の神とよめつとま
賀公の社司流身堂とく百目れあふ

ふかしの山



大さ



浄霊會ハ九月十日也。あとの七月ハ出
しとく舟墨の扱もく。下松の西接亦へう付
し。俗ぬそのうら。産人ちんら新詣昼夜と
うらぐり守あきりく。系屋かろひなりけ
り。糸礼よはたかくかこ十二女もせ。産人
供ちあしきほつるなりや

○若狭川 鳥井のおちなり川なり

○上野。紫竹。大門。とんを左おつづきも。と宮の
小のこころにこそ

○萩野 一人野のしーらむ。紫車ハんらと

野くくえとぞ。萩の名ハせとーしとよ。萩は
けりやま。萩乃はとむむ。松虫のそま志
げくおつとく。いむ物長あつお。袖も一入
おほけく。おほくはま。ちん。紫のしとん。とく
さるえり。月のあえり。とつあつよ。とやこ人た
くし。来て。かそ。はとむむ。びわげ。唐衣とる
萩うばり。なり。とて。小き。曲物。そと。とん。と
さす。とら。り。を。入。音。よ。た。う。ら。と。と。つ。は。め。て
家。は。と。あ。軒。の。風。流。よ。あ。と。そ。り。家。は
録。と。ら。い。は。あ。と。ら。に。あ。け。の。は。ら。な。け

けりぐりてきてぞとてしるがごとく今も
ちとちとて定家卿の感おしとて
あつとておのの屋ぐりお後たつらん
うらうら。俊定卿のんちとてよそとて
あつとてたつし。奈たつしとてつとて
なつとて興儀ふ

常盤故御所 ともむおのつとてつとて
あつとておのの屋ぐりお後たつらん
て大徳寺玉室の初代とてつとてつとて
後たつらん。おのの屋ぐりお後たつらん
えつとておのの屋ぐりお後たつらん

うらうらとてけりぐりてきてぞとてしるがごとく今も
ちとちとて定家卿の感おしとて
あつとておのの屋ぐりお後たつらん
うらうら。俊定卿のんちとてよそとて
あつとてたつし。奈たつしとてつとて
なつとて興儀ふ

安楽花 二月十日也けさのあつとてつとて
ま。賀茂上野の村人のつとてつとてつとて
うらうらとてけりぐりてきてぞとてしるがごとく今も
ちとちとて定家卿の感おしとて
あつとておのの屋ぐりお後たつらん
うらうら。俊定卿のんちとてよそとて
あつとてたつし。奈たつしとてつとて
なつとて興儀ふ

紫野

は野はらの大匠なる乃澄也

又本集に漁垂高弁に宮人乃かづりて
るはあつひ若よけあゆまのくもよころろ
あつて本歌よ明日ハ又その河波まのり
野もやあまの海あり

大酒刺

○は寺ハ今宮乃南之剛山火灯圓師也龍寶也
妙超姓ハ代式リ播磨播磨西之云亦此人也宗峯
也号と父母子なりさのてはうもくすかつら千
の和音論見音のりては母れ多て傍

ありと系といひてうら白死と夢のひも思ひ
りや姓めり妙超つてこの骨をびへ之眼えりや
之と云はれあつて十一歳あつて書寫の戒律師に
は久経公はの九流之流百家の異なりと
究め未終をもろくすく京都相摸につて
流を宿と冬向して後建長の大應圓師
禪一悟道第一の師子こなるしね大應速度元年
十二月遷化すく妙超ハ京小とつて東山の雲居
寺之御居しけは本歌の勢と傍の人を出世
乃事つひくがたなくいふ野に入仏願はつれし
一法堂よりわきまのやと又洗心子云

法下。も亦。儒者九人。一者。禪家を破さん。と
 朝廷に奏し。議論より。くまなく。破傷のく
 御小より。け。志く。を。才。子。こ。か。あ。は。は。心。子。い。ん。を。先。福。
 大徳の才文と云。雲。門。庵。と。号。せ。一。匹。花。園。帝。妙。超。
 を。多。く。依。法。不。思。議。と。は。法。對。ま。と。勅。之。け。は。始。起。
 奏。ま。く。王。法。を。思。改。ら。私。法。を。守。り。と。勅。令。せ。り。
 より。後。後。融。融。天。皇。と。い。ふ。中。寇。思。つ。く。澤。く。辱。
 く。も。投。機。頑。以。震。動。に。わ。さ。ば。り。又。西。朝。特。賜。無。福。
 大。灯。之。照。正。灯。圓。師。の。号。と。賜。り。念。に。於。教。不。以。け。せ。ん。
 の。一。よ。か。ん。こ。の。論。別。以。為。り。く。後。建。武。丁。丑。丁。
 月。大。う。り。正。化。事。の。六。倍。贖。と。す。に。て。し。を。

舟思

○ 糸野のうらうらな。弘法大師舟思とて
 久墓所乃一つりり
 玉葉集に舟思のともそ。聖のはけ。乃。教。え。ん
 て。ま。う。し。ま。ん。人。よ。ぞ。ん。と。あ。し。つ。ら。と。う。め。り。あ。
 西の法師。づ。う。あ。く。い。は。ら。ら。と。あ。あ。ば。な。り。あ。
 い。の。く。も。然。燈。の。あ。ら。く。ひ。ま。の。あ。ら。く。
 お。く。の。も。き。れ。さ。ら。と。と。ま。ら。し。又。あ。ら。く。
 舟思のあ。ら。う。に。こ。ら。あ。ら。く。花。の。け。い。あ。ら。く。
 ぶ。は。う。く。そ。か。ら。う。人。の。其。名。に。い。は。ら。く。
 傷。く。祿。や。ま。し。と。せ。い。さ。ん。と。く。ま。ら。し。

ほそい月の比羊躰躑にささるる浄と
しるる之の庭の人もはくくうけくくさ
乃秋てきぬむらさきもあやのの
まらふに叶しつゝあつたつ

蓮臺野

○け野の舟屋の由とそ七野の舟屋の
世にほくくゆりハ今宮ふれりくく
のくくや一日余あとのなうらうりや
かくさくくくくけき乃くくくくく
あくあうくくくくくくくくくく
教へ舟屋のまらうり野くくくくく

蓮臺寺

○い寺舟屋の西なり弘法大師は舟臺とわ
箇魔堂 千代

○い堂蓮をもつれ南なり

をのくくくくくくくくくくくく
をたつしつ他ともり。まの月の比きやれん
まなん亀の院の所付。文おき中に物と人
くくくくくくくくくくく

由亮院

け院いんまをむらうくくく
或れくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくく

つしとゆつしに少あをくをゆりさ。さくさ菊
萩とゆつし。さくさ菊とゆりさ。さくさ菊
少室はけいしんりぬさくさ

周禮に凌人也。注水室やとと。鄴城旧事に氷井臺

ととと。魏志に建安十九年さくさ魏王曹操

の其を凌はくつし。少とさめく凌室

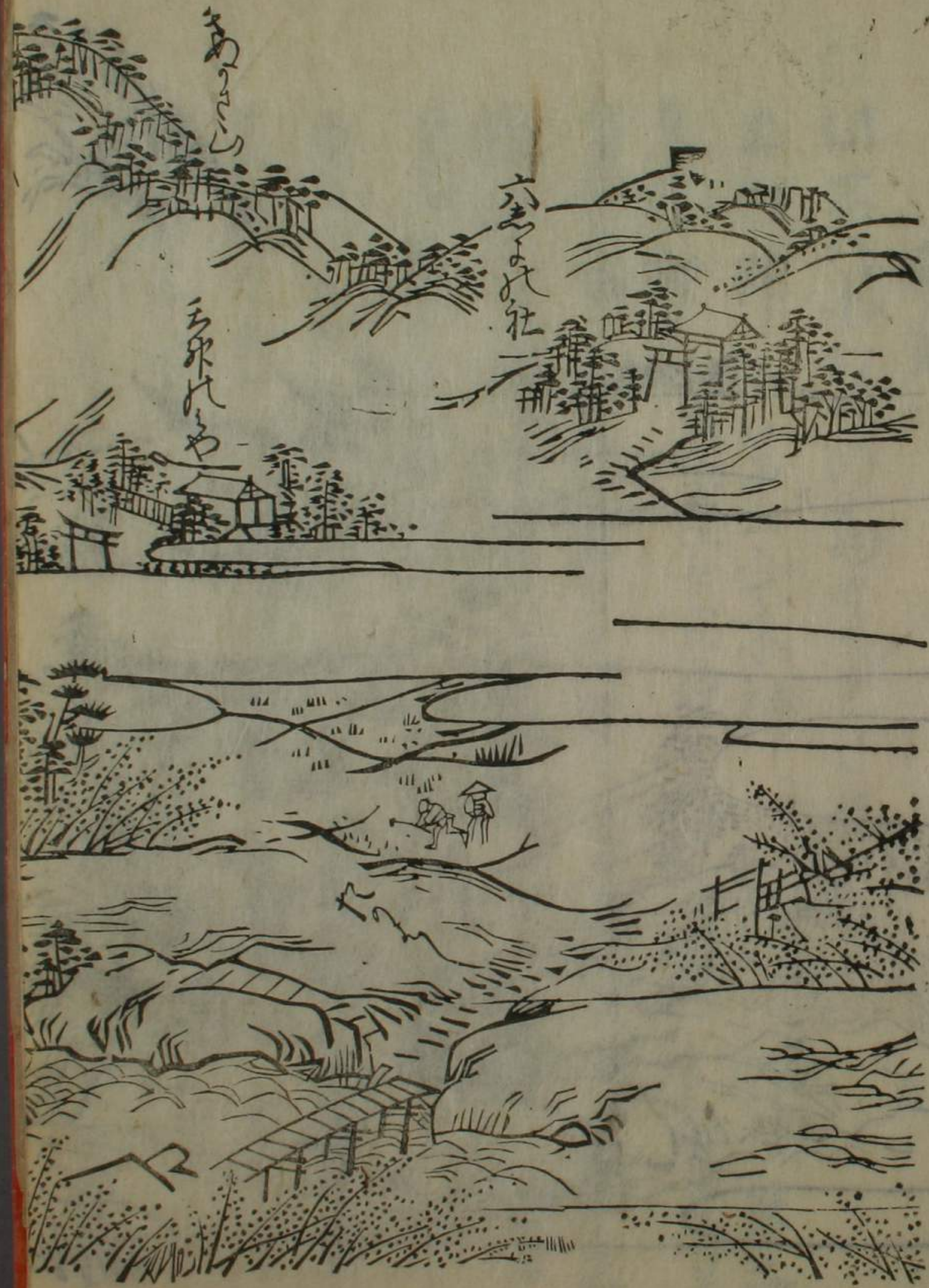
又氷井さくさ。唐の上林令。氷井藏

ととゆつし。職司農よりせけり。

宋朝會要に建隆二年に氷井務はくさ

皇城司子隸

又考く小因が變りあわく。后稷えと王業とゆ
り乃の冠邪と乃さくさ待り。二之日穀金鉅冲くさ目
的は凌法ととと。春秋た氏傳の昭公四年さくさ申豐
同日を凌而蔵さくさ西漢朝觀而出定かさるさくさ
牡拒泰以子司異さくさ





平野

○けし平野のありさま也

久社神

第一会末神

日本武尊源氏神

第二

久度神

仲哀天皇平氏神

第三古用神

仁徳天皇

高橋氏神

第四比賣大神

天昭大神大湊氏

第五

鞆神

天穗日命菅氏神

四姓 中原

清原

菅原

秋篠 已上中久一社也傳く八姓氏外

白土門乃親の祖又くそそ子守此社也

子守

平野

延暦年中にぞめくけ社也

延暦元年十一月九日よ初ら祭祀をせり

御あしりもつらうと云はれど、
一りりあわぐぞ。御あしりもつらうと云はれど、
昭山五堂と贈号し、つらうと云はれど、
長老の勸修寺儀同晴豊の男なり。御あしり
おと太上天皇の濃信の御あしりもつらうと云はれど、
院殿の御あしりもつらうと云はれど、
乃入室の御あしりもつらうと云はれど、
つらうと云はれど、
つらうと云はれど、

○世のなまじりに金剛刺と云はれぬ。
義満將軍の御あしりもつらうと云はれぬ。
つらうと云はれぬ。
つらうと云はれぬ。
つらうと云はれぬ。

衣笠

○けふの山に雲のあはれ。衣笠の影をまらぬ。
つらうと云はれぬ。
つらうと云はれぬ。
つらうと云はれぬ。

やぐに沖乃をまゝに流しきりしるし
河内三つに秋かゝりて縫ぬいうけりるや、あらど
つよ衣えをききよむる白しろうし

明王院

○け院。鹿苑寺の近隣や。弘法大師のあま聖
みくく。なごころ。不動ふどうや

石のく。門かどをびく。はく。こ。おなご。く。なご。も
ふなり。い。い。名。他。の。伝。と。ま。ゆ。り。あ。せ。し
は。く。く。く。く。不。動。と。の。こ。り。を。か。ら。せ

六所宮

○け宮。衣えをき心のこころのまじ藤

天神社

○け。鹿苑寺乃をまや三社立りり。な社は
天神。左八幡社右春日神也。

年としをとらしてふ二月十日に。少すくいまをし。西にしのをまげ社
あらまのうらまのいまをし。鳥とり帽ぼうのあらまり
あらまのいまをし。となりしてる。たらり。ともみあらまのいまをし。はらん
ゆりわ

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or document, written on aged paper. The text is oriented vertically on the right page of the open book. The script is dense and appears to be a historical form of a European language, possibly Italian or Spanish, given the use of characters like 'L' and 'M'. The ink is dark and the paper shows signs of age and wear.

